随想三題

カット／ヒロセヤスミ

地蔵をまつる家

広瀬　安美
〈マンガ家〉

「田麦俣（山形県）の草ぶき屋根は、娘さんの高島田のように艶やかでたっぷりふかれているが、鹿児島は、老婆のひっつめ頭みたいにまるで色気がない」ってなことを書いているものだから、原稿を受取りにきた雑誌の編集者は「民家を女に見立てて書くなどは、前代未聞。変っているが、面白く結構です」アハハと笑いながら帰った。

日本全国を民家遍歴しはじめ、十五年以上になるが、いつまで経っても、シッポのない馬で、いまだかって、まともな民家論というものは書いたこともないし、柄でもない。この「神戸の民家」も、その例外であろうハズはない。

朝日新聞広域版に「兵庫の民家」をかき、丸二年四カ月、アキられもせず、まだ続いているが、これまでに頂いた手紙やデンワで、多かったものからあげると、広瀬安美なる人物は女性なのかというのが筆頭。次いで、女の子の年令と名前をきき、モデルの有無だ。グーンと少くはあるが、「山田の千年家」がのらない。このような民家は、一番初めに取りあげるべきではないだろうかと、ご注意があった。「山田の千年家」とよばれるこの民家は、兵庫区山田町衝原（つくはら）にある箱木勇家のことで、現在、日本全国に国指定重要文化財の民家は百六十余軒あるが、室町初期と建築年代がもっとも古いのでよく知られている。重文に指定されると、その家は、少しの現状変化も許されない。従って十年、二十年と、同じ状態の家に住まなければならないというはなはだ不便利極まりないことになる。多くの持主はサッサと別に家を建て、その家を立去り、入場料をとって見世物にする。そんなことが出来ればよいが、そうでない人にとっては、この家に住むことは、よりよい快適な文化生活を求める人間性を否定するザンコクなことになる。住む人たちの、そんな不満が反映するのか、民家の持つ、母子的温かみを次第に失い、まるで面白くない成上りパパアみたいになってしまう。私は箱木家だけでなく、重文の民家をかかない理由はそんなところにある。

神戸市内で草ぶき屋根をもつ民家は、兵庫区山田町から有馬温泉への街道筋と、垂水区伊川谷や押部谷で、まだかなり見ることが出来る。そのほとんどは入母屋造り平入りの直屋（すぐや）で、棟にカラスとよぶ、ワラ束や木を交差させた棟押えをのせており、戸口（入口）脇に風呂場を持ち、頭は派手だが、どこか庶民的で、ヘアーピースをつけ、エプロンがけの中年婦人というところか。農村地帯にくらべ、町なかでは、これといった古い家は比較的に少ない。これは戦災で、大半を失い、それに加え、都市改造で取りこわされたためだが、そんななかにあって、兵庫区西出町に、家の一部分に地蔵をまつった古い家が多くある。地蔵信仰は全国的に盛んで、

団地でも、地蔵堂をつくり、八月の地蔵盆には盛んなお祭りをするが、多くの場合、地蔵堂は別に小さい祠(ほこら)を建てているが、西出町のように、はじめから、地蔵堂を家の一部に造るべく設計して建築をした家というのは、日本全国にも、ほかに例がない。

神戸で、これまで一番心ひかれたのは、地蔵堂を一つ屋根の下に持つ西出町の家で、働き者で気のいいかあちゃんの匂いがする。

神戸でサンバを

古谷　哲也
〈パーカッション〉

五月のある日「神戸っ子」から電話があり、神戸まつりにぜひ参加してくれと言う。よくよく聞いてみると、サンバのリズムを皆に叩き込んで欲しいというのだ。マアとにかく腰を上げて行ってみると、甲南大ブラジル研究会の頼りない音、これは大変、どうなることか！　とさすがの僕も頭を抱えただが、しかし、まあやってみることだ。幾度も幾度も繰り返し体でリズムを覚えることしかない。そう思った僕は、楽器の改善からと、フライパンをわんさと買い込んで来た。何も難しい楽器はいらない。本場のブラジルの楽器だって種々雑多、ここでちょっとそれらの楽器を列挙してみると……カンキンコン、カンキンコンと鳴るアゴゴ、ククク、クッと鳩の鳴き声に似クィッカー。トントンと単調な大鼓の音を思い出させるタンブリン。弓の糸を叩いて出すビリンボン、そして、周知のマラカス、タンバリン、カラサなどということになり、結局音の出る物なら何でもいいということになる。だから、フライパンでも、スプンでも、バケツでも台所用品なら殆んど合格である。それを、リズムに合わせて叩けば、体がのってこないはずがない。

サンバはリズム。ワン・ツウ・ワン・ツウの簡単なリズム。

そして、祭りの当日。付近の苦情を背に、転々と場所を移動しつつ、練習に情熱を燃やした若者達のサンバは、特訓の甲斐あって、みちがえる程陽気な、楽しいリズムに変貌していった。

手に豆を作って頑張った彼等も我々も皆、サンバのリズムに酔いしれていたが、多くの観衆との間には主客の差があった。神戸まつりは、神戸人の皆の祭りであるはずなのに、どうしてこんなに隔たりがあるのか、これは僕にとって非常にショックなことであった。習慣や社会こそ違え、リオのカーニバルには、身分や権力なんてものはお祭りの一語で無価値なものになってしまう。皆、同等の立場で一緒になって祭りを楽しむのだが日本人には、そういう感覚が薄い。それには色々、内的、外的要因もあろうが。お祭りなんだ。皆で楽しもうじゃないか。

誰でも乗れるサンバを皆で汗流して踊ろうじゃないか、神戸の町から、フライパンさげて、サンバで本当のお祭りを示そうじゃないか。

〈サンバ　デ　コウベ
　ビバ　ビバ　サンバ
　サンバ　デ　コウベ
　ビバ　サンバ
　サンバ　デ……

の曲にのって、ポリさんも、お年寄りも、子供達も、みんなみんな踊ったら、こんな楽しいことは無いんじゃなかろうか

そう考えると、来年の神戸まつりのために、僕の仕事がもう一つ増えたような気がする。

来年こそは学生バンドも街のバンドも一緒になって神戸の街をサンバの渦に巻きこもうじゃないか。

次なる機会のために

夏目　俊二
〈俳　優〉

トータルシアターへの試みなどというと、ちょっと耳新らしくて、なんとなく曰くありげなのですが平らにいえば、今まで芝居の中で従属的な立場をとっていた、いやとらされていた音楽なり舞踊なり美術なり照明なりの要素を、もう一度、角度と視点を変えて対等の立場におき直した上で、相乗的な演劇空間を創りだそうということで、いわゆるリアリズム技術だけでは表現し足りない現在の世界の多様さに迫るひとつの方法です。混同され易いミュージカルスとの決定的な違いは、歌あるいは踊りが主体となって進行するのではなく、あくまでも芝居そのものが軸になるという点です。

と、まあ、解説的なことはさておいて、今度の劇団神戸の「むかし海ミドリムシ（安水稔和作）」上演は、そんな新しい創造方法をつかまえようとする実験のほかに地元の持てる力を輪につないで、今まで顔みしり程度だったさまざまのジャンルを結びあい、触発させるエポックにしよう。地域のオリジナリティを掘りおこす足がかりにしようという欲ばった目的を併せ持っていたわけです。

陳舜臣氏によれば「待ちに待ったトキが来た」ということになるわけですが、演出に日本歌劇団の津山啓二氏、美術に中西勝、板矢真紀の両氏、音楽に鈴木洸氏、衣裳に藤本ハルミさん、琵琶の柴田旭堂さん。

それから劇団神戸のほかに芦屋から姫路までの五つの劇団と、花柳芳恵一子さん、上月倫子さん、藤間緑寿郎さん。

ブラスポルテーニョと神戸プロムジカアンサンブル生演奏。

ＢＫ合唱団のコーラスにＰＬのバトントワラーのお嬢さん方まで、優に百人に及ぶ大編成で、これだけの智恵と技術をあつめたことは、地元ではあまり例のないことですが、それが即、演劇的な密度にならないところが、芝居の恐ろしいところ、味のあるところでもありましょう。

要約してしまえば、それぞれの方法論を理解し尊重しながら、同次元の行動に統一する具体的な手段が、限られた時間の中では、どうしても見つけられなかった。

つまり、意欲と行動を同じスタートラインから出発することが出来なかったということにでもなるのでしょうか。

はじめから予測された懸念が、そのまま結果として残ってしまったわけですが、これはこれほどの大世帯にもかかわらず、おきまりの人間関係のトラブルがほとんどなく、大人っぽい空気の中で奉仕と妥協の姿勢がフルに発揮された結果、中西さんの言う「イチャモンつけあおう」の精神が微妙に変化したためと見るべきなのでしょう。

ともあれ、普通なら公共団体の旗ふりなり財政的援助なしではなかなかに実現しにくいこの種の公演が、自主的な形ですんなりと現実化し、多少の赤字を除いては、協力しあった全員がなにがしかの収穫を得たという事実が、この神戸に、時と可能性のあることを実証してみせたといえます。おぼろではあっても、したたかなスタートラインが誰の目にも見えはじめたのですから。

★あるつどいその足あと

日本アマチュア無線連盟神戸クラブ

アマチュア無線神戸クラブは昭和三十四年に発足、主に神戸市内のハム（アマチュア無線家）によって運営されています。現在会員数は百三十名ほどで神戸市内のハム人口の約一％弱です。会員の平均年齢は約二十七歳で現在日本のハム年齢よりはるかに高い位置にありそのためメンバーも種々雑多です。サラリーマン、商店主、先生、医者、会社社長、メンバー内で生活必需品は一式そろいそうです。

会員の九〇％までが、自動車に無線機を乗せクラブ員相互のコミュニケーションの向上に努めています。一方家にもそれぞれ立派な無線機をおき海外との交信等で楽しんでいます。製作ずきの会員もいて無線機を作ったり、こわしたりして楽しんでいる人もいる一方無線機を高い山の頂上にはこび、高い周波数でどれくらい遠くまでとどくか？　というようなこともやっています。

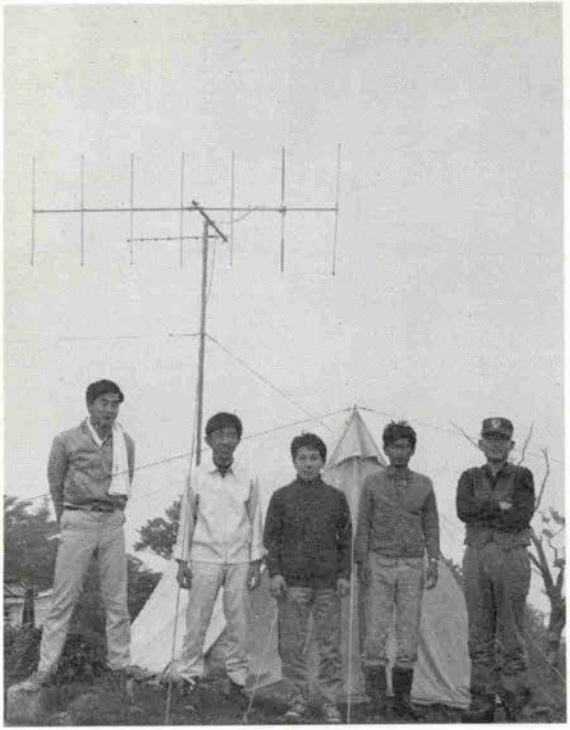
昭和四十一年に行なわれました乗鞍山山頂よりの実験では横なぐりの雨で不調の発電機を駆使しての交信は今だ我々ハムの間での記録は破られていません。

また、深夜寝静まった頃に起き出しアメリカのめずらしい国々と短波での交信をし、そのQSL（交信証）カードを集め、そのエリートぶりをはっきしている会員もいます。しかしこの交信もめずらしい国（ハム人口の少ない所）ほど交信がむづかしく四時間も、五時間も、待たされ、ついにNGの時もあります。新しがりやが、ハムのもっとも重要なポイントで、常に人より先んじて人のやっていないことに取り組むことがアマチュア精神なのです。そのような意味からアマチュアテレビ等はもっとも関心の強い所で我々の仲間でも赤穂義士祭をアマチュアテレビで中継しプロのテレビ局員を「アッ」と言わせたメンバーもあります。

一方ブームとでも言おうか、増えつづける「ハム」のために現在日本はアメリカについで世界第2位の「ハム」人口を有しています。スキー、ゴルフと同じように「ハム」の世界も例外ではありません。大衆化するほどモラルの低下もふせげず、世界のハムからもNOT、JAPAN（日本とは交信しない）といわれようとしています。

このような状態をふんまえて我々のクラブではモラルの向上をはかり、真の「ハム」とはといったことをアピールすべく頑張っています。

日本アマチュア無線連盟神戸クラブ
会長・片岡千佳雄（JH3COS）
連絡先・神戸中央局私書箱一二五五



大台ケ原山頂より超短波での交信にいどむクラブ員

KOBE TELEPHONE SERVICE

何処にいらっしゃってもあなたの〝秘書〟がついています

●あなたを夢の島グアムへ無料でご招待いたします!!

旅行日程(予定)・出発日…8月31(木)(日本航空利用)
・場　所…大阪空港発
・滞　在…現地3泊

資格;

(1) 6月10～8月10日迄の2ヶ月間に
(2) 神戸テレフォンサービス㈱の会員(年会員)5名以上ご紹介いただけた
(3) 18才～28才迄の独身女性

あなたを**社長サン**とおよびしたいわ……

おいそがしい時に本当に申し訳けありませんがわたしのお話をチョットダケお聞きください。

わたしは神戸ではじめての女性バカリの秘書ぐる～ぷ神戸テレフォンサービス株式会社のメンバーです。

わたしたちのぐる～ぷは年頃の娘がお嫁にも行かず殊勝にも何か世のため、人のためになるお仕事で自分自身も生きがいのあるものをとずうっ――と考えてまいりましたが**ズバリ**みなさまのお役にたてることを思いつきさっそく実行に移しました。

それが**Telephone Secretary(電話秘書)**という余り聞きなれないお仕事です。情報化時代ともいわれる現代になくてはならないものだと信じています。

●**何かやりたい!**でも独立するには事務所も電話も事務員もetc ……あぁ～やっぱり無理か!!?

俺は一生サラリーマンか畜生!!(脱サラ型)

●**サラリーマン**は気楽な稼業ときたもんだ♪♪

でもサイドビジネスでデート代くらいうかせたいなぁ…(サイドビジネス型)

●etc……

おやりなさいよ、あなた男でショ!!わたし達あなたの味方よ応援しますわョ……

ヤル気のある人は今すぐお電話をどうぞ。

神戸テレフォン・サービス株式会社

私書箱
神戸中央郵便局
私書箱1158号

神戸市葺合区生田町2丁目4番地 〒651
新神戸駅前 パークハイツ3F
Phone 神戸(078)241－8881代表

午前9時～午後8時　年中無休
●入会金　1万円
会　費　5万円〈12ヶ月分〉

□れんさい史話 4（最終回）

神戸の発展と川崎正蔵

宮本 又次〈関西学院大学教授〉

一

神戸の発展は兵庫人の直接の寄与によるよりも、むしろ外部から来た人々と外来資本によって進められたといってもよい。例えば神戸港が栄えると貨物の陸揚げ、運搬、保管などが必要だと考え、明治十七年十一月藤田伝三郎、田中市兵衛、杉村正太郎らとともに五代友厚は神戸桟橋会社を創立しているが、港の整備も大阪の経済人の手をかってはじめてなしとげられたといえる。

二

とくに川崎正蔵の神戸への寄与は大であったといわねばならない。

薩摩指宿（いぶすき）に密貿易の海商浜崎太平次がいた。大隅国分八幡宮の神宮にいで、海運を業としていたがその五代目、八代目みなすぐれていた。琉球との通交をもって抜荷（ヌケニ）貿易にて巨富をつんだ。鹿児島にも本拠をうつし、長崎にも大阪にも、その他各地に支店をおいた。大阪にても立売堀に支店をもっていたが、肥後孫左衛門がその支配人であった。そこの番頭の一人に川崎正蔵がいたのである。正蔵は琉球にもしばしば渡航していたが、明治になって日本政府郵便蒸汽船会社の副頭取になった。川崎は廃藩置県で、薩摩の国産会所が設立されたとき、その責任者となって沿岸海域の海運に活躍していたが明治五年には大蔵省から国産の調査を命ぜられて、琉球に渡った。そして琉球航路を開設する必要を知って政府に建策した。このプランが政府からみとめられて副頭取という資格で、半官半民の郵便蒸汽船会社に入社したのであった。それより先、川崎正蔵は自分の持船も持って海運にあたっていたが、このとき郵便蒸汽船会社に合併させてしまった。

土佐の岩崎弥太郎は土佐開成商社を九十九商会にあらため、明治五年三ツ川商会とし、翌五年三月には三菱商会と改めた。そして海運業をやっていたが、日本政府郵便蒸汽船会社が半官半民で老朽船も多く、サービスも悪かったので、岩崎の方は乗客を親切にあつかい、次第に栄えて来た。

明治七年に台湾征伐のとき岩崎は軍需輸送をまかせられ、これを契機に日本政府郵便蒸汽船会社にとってかわって優劣となる。明治八年三菱蒸汽船会社と改称し、手あつい政府の保護をうけたのに対し郵便蒸汽船会社の方はつぶれてしまう。この岩崎のめざましい躍進にひきか

川崎正蔵

え、川崎正蔵は海運界に雄飛する夢をやぶられ、他の方面に手をのばすことになる。その一つは紡績業であった。

日本最初の機械紡績所は鹿児島磯の浜の藩営洋式紡績所だろうが、明治元年十一月に堺に移され、堺紡績所となった。そして明治十一年には浜崎太平次に払下げられ、浜崎の大阪支店長肥後孫左衛門が経営していたが、十代目の浜崎太平次が没落してから、これも川崎正蔵の手に帰した。

三

明治二年に神戸に小野浜鉄工所が出来た。これはアメリカ人のミュアヘッドの創めたもので、のち東川崎町にうつった。中日貿易会社が会計を担当したので、ツレジング商会製鉄工場ともいわれた。初めの内は木造汽船の修理所であった。

明治三年五月に金沢藩は加州製鉄所をつくったが、五年政府に買収され、兵庫製作所となり、のち農商務省の兵庫造船局となった。そしてやがて官業払下げで、川崎正蔵の手にはいり、十九年に神戸川崎造船所となる。

これより先川崎正蔵は大阪土佐堀にて官糖取扱店を開き、琉球の反物をもあつかって、高砂丸、布引丸の帆船をもって運送にあたっていたが、岩崎の海運界における雄飛を見て、むしろ造船業に専心すべきであると考え、明治十一年東京築地に造船所を開設、幕府の主船技師安井定保を聘し、築地造船所にて北洋丸という西洋型船を建造した、東京にては森村市左衛門と親交あり、その援助による所も大であったが、明治十三年川崎は広田重助、肥後孫左衛門をひきいて兵庫東出町にも造船所をつくり東京と相対峙して活躍しはじめる。あたかも官営の兵庫造船局の民間への払下げあるを知り、その節に願出し、払下げについては平野富治一派との競争もあったが、明治十九年五月拝借の許可を得、二十年七月に払下げとなったものである。

当時兵庫にはイギリス人ギルビーによるギルビー造船所があり、十七年にギルビーが死ぬと海軍省が買収して同省主船局付の小野浜造船所となっていた。

しかしこれも二十八年六月には閉鎖されてしまい、結局神戸にある代表的造船所といえば川崎造船所ということになる。

川崎造船所は日清戦争で本格的な造船所となり、川崎正蔵の個人企業から脱皮して、明治二十九年には株式会社組織となり、やがて川崎は引退して、会社の初代社長として松方幸次郎をすえる。幸次郎は川崎と同郷の薩摩人松方正義の三男であった。川崎正蔵が神戸の工業化、近代化につくした貢献はいくら評価してもしすぎることはない。

明治三十八年に出来た神戸三菱造船所、四十年に開業した赤穂相生村の播磨船渠株式会社と共に川崎造船所は神戸がそだてた代表的な重工業といってよい。

＊　＊

☆れんさい・めるへん〈2〉

海港奇聞

——キネマの月巷に昇る春なれば——

稲垣足穂
え・中西勝

あのプリントでおした童画的な輪型フィルムがくるくる廻るおもちゃ映写機は、今でも残っているだろうか？

あれはエジソンの「キネトスコープ」を真似たもので、本物ではフィルムの長さは四十フィートに定められ、「砲兵隊の行進」だの、「汽車」だの「海水浴」だの、「美女の踊り」だのが循環するだけであった。でもこれはたった一人しか覗けない。それを映写幕に映して大勢の鑑賞にそなえたのが、フランスのリュミエール兄弟である。エジソンの方も又「ヴァイタスコープ」に進出した。

それにしても現在全世界に君臨しているあの35㎜フィルム及び4:3の割合におかれたコマは、いったい誰がきめたのであろう。私は調べているが、今のところ不明である。

京都知恩院の相談役で、のちの貴族院議員、稲畑勝太郎さんは明治二十九年に、京都織物会社設立準備のために、渡仏した。この折、リヨンのマルチニェール工業学校で、兄のルイ・リュミエールといっしょだった。先方の兄弟は写真屋で、「こんど動く写真を発明したから、ぜひ一度見てくれ」といわれたのが縁になって、稲畑氏は「シネマトグラフ」の東洋における興行権を獲得することができた。その条件は興行総揚り高の六割を支払うというのである。勿論、先方から技師がひとりが従いてきた。これはチェッカー、即ち興行成績の監視役である。

稲畑さんの帰国の船がアメリカを経由した時、エジソンの「ヴァイタスコープ」を買った日本人が、同じ船に乗った、これが新井貿易商会のある新井三郎さんである、のちの日活社長の横田永之助さんは当時神戸で内外物産貿易会社を経営していたので、新井氏とは知人の間柄であった。彼はヴァイタスコープの興行を依頼された。また、彼の兄を通じて稲畑氏をも知っていたので、「シネマトグラフ」の興行についても相談を受けた。横田さんには、先にアメリカからX光線を持ってきて、一般に紹介したという実績があったからだ。横田さんは東京の浅草公園で日本で初めてシネマトグラフを興行したが、ヴァイタスコープの方は、

他に引受人があったので、それに任せられた。

明治三十年一月、シネマトグラフは、京都の電灯会社前の四条河原で実験されたが、カーボンに通じる電流の程度が判らなかったので、たちまちカーボンがふっ飛んでしまった。電灯会社の長谷川技師がいろいろ考案して、島津製作所で変圧機を作ってもらい、やはり加茂川原で試写をした。翌月、大阪の南の演舞場での公開は警察がなかなか許さなかったのをいろいろ交渉して、やっと許可されたが、この時も電流が直流か交流か判らず、石油発動機で発電したため、映写機のランプを毀してしまった。

＊

これで、シネマトグラフには、光源としてカーボン・アークが用いられていたことが判るが、われわれが初期に知っているのは、酸素ガスを使うやり方であった。

即ち二酸化マンガンと塩素酸加里をまぜ、これを金属製円筒の中に密封して、アルコールランプかコンロの火の上で熱する。発生したガスをゴム管でタンク内に導くが、この容器は水槽の中へ伏せてある。ガス圧がおし上げてくるのを防ぐためにおもりが載せてある。タンクのガスは、改めてエーテル蒸気、あるいはアセチレンガスと共に点火器に誘導され、その噴出焔を小さな円筒状の石炭片へ吹きつける。これが「ライムライト」である。

われわれが活動写真の宵に、会場の入口に立つと、何とも言えぬ透明な、きゃしゃな、同時に危険感をそそる匂いが鼻がしらを打った。この大好きな活動写真のかざは、実は酸素ガス発生機から漏れていたのだということが、私には漸く最近になって判明した。

「キネマトスコープ」の我国における最初の興行は、貸席神港倶楽部であった。

このキカイは、神戸の銃砲商の高橋信治という人が、リネル貿易商会を通じて輸入したものである。この興行は東京浅草を経て転々とした末に、北海道方面まで持ち込まれたが、結局「ビイドロ利用の写し絵」程度にしか受け取られなかったようだ。だから、つまり明治六年に輸入されたという「西洋幻灯」に毛が生えたものだったからこそ

――

私の「キネマの月巷に昇る春なれば」のうたは（自分は中山手二丁目かトアロードのつもりでいるが）実は花隈辺りの坂道に取り替える必要があるのかも知れない。

＜作　家＞

□神戸まつりずいそう□

神戸まつり特にパレードに於る集団的偶発性及び先入的態度及び常識的態度についての研究を

筒井　康隆〈作家〉

ブラジルクイーンと一緒に、左が筆者

記憶が鮮明なうちにと思っていそいで書きはじめたものの、手がふるえて思うように字が書けない。といっても睡眠薬中毒のためではない。昨日パレードの最後尾の車に乗って、マラカスを叩きすぎたためである。マラカスは普通、振って音を出すものであって、叩くものではない。しかし昨日、ポルトガルのお姫さまから奪ったあのマラカスは普通のマラカスの優に三十倍はある大きなもので、その周囲を網目の数珠がとり巻いていた。なんという名の楽器なのか、おれは知らない。とにかくそいつを平手でぶん殴り続けたのである。両の掌が腫れあがってしまった。その掌を見せると、ブラジルのお姫さまは苦笑しておれからマラカスを奪い返し、音を出して見せてくれた。なんのことはない、数珠は片手で押さえておき、中のマラカスだけをぐるぐるまわせばよかったのである。

お祭りには参加すべきである。おれはそう思い神戸まつり第一日目にも市内へ出かけている。もっとも、買い物がてら出かけたものだからセンタ

ー街を通っただけ、お祭りらしいものには出会わず、落書き用に作られたでかいパネルを眺めただけだった。面白い落書きはやはり便所にしか存在しないのだろうか、ここの落書きはバカと傘印がやたらに多いだけのものだった。こういうパネルを作った時は、やはり誰かが最初に気のきいた落書きのお手本を書いておくべきである。そうすれば、人間というのは負けん気が強い動物だから、われも我もとない知恵をしぼって何か書こうとするのである。

帰途、車で神明高速月見山インターチェンジを通過する際、須磨離宮公園の打上げ花火をたっぷり見せてもらった。たっぷりというのは、大変な車の渋滞で、若宮から月見山までの間の所要時間が約三十分だったからである。車の中でさほど退屈せずにすみ、これは儲けものであった。渋滞の原因は、離宮公園の無料の音楽会へ行こうとしてマイカー族が押しかけたためである。

おまつり二日目はパレードを見るためにフラワー・ロードへ出かけた。神戸っ子の車に乗ってマラカスを叩いたのはこの時のことである。パレードに関してはこの日の夜、サンテレビで永六輔や黒田征太郎、その他の人たちと意見を述べあい、さらには神戸まつりのありかたについて議論を戦わした。今、その内容を整理してみる。

1、神戸まつりとしての特色はあったか。

あった、という結論に近づいたようだ。無宗教性、無国籍性がそれである。この点で従来のおまつりと違うことは確かだった。氏族の営む集団企業としてのおまつりは、ぼくは好きではない。寄附を求められ、金額が紙に書いて貼り出され、町内の世話役だけがおまつり本部で樽酒を飲んでいるあの形態は、自由な参加を拒むものである。特に団地ができ、雑多な人種が同居している大都会でのおまつりとしてはもっとも不適当な形式であると思う。そこで次に、それでは

2、自由参加はできたか。

と、いうことになってくる。ある程度はできたしかし、まだまだ物足りない、という結論だったようである。これはフラワー・ロードの両側にずらり並んだ見物の人たちを参加者と見なすかどうかで変ってくる。しかしふつうは、パレードを見世物的、演劇的に考えて、観客は参加者と見なさないのが常識である。観客の方でも、おまつりの見物人はあくまで見物人、どうせ参加はできないのだという先入的、常識的な態度で、おとなしくパレードを見ていたようであった。あれでは今までのおまつりと何ら変るところがないのだからもっとハプニングがほしかったという意見も出た。見るだけで満足した人も、もちろんいたことであろう。だが、その機会さえあればパレードの中へとびこんでいきたいという人もいた筈である。問題はその人たちにとびこむ機会をあたえてやったかどうかという点にしぼられた。

むろんこれには、パレードに加わることは楽しいことであるいとう前提が必要だが、これは議論の余地なく、パレードに加わっていた人は、どんな仏頂面をしていた人もすべて楽しんでいたことを全員が一致して認めた。しかし、パレード最後尾の例のサンバをのぞき、一般観衆が自由に参加できる雰囲気ではなかったことも、全員が一致して認めたのである。その原因は、警官の群衆整理

の厳しさにあったという意見が圧倒的であった。

3、おまつりの群衆整理及び警官の役割について

昨年の神戸まつりをぼくは見ていないがこの時は通りの両側へロープを張ったということである。これが悪評だったため今年はロープをとっぱらったのであろう。おまつりとして一歩前進したことは確かだ。しかしそのために警官の威嚇がはげしくなったのでは、プラス・マイナス・ゼロである。

どうして婦人警官にやらせないのか。どうしてあんなに観客の前をこれ見よがしに歩きまわるのか。

いろいろな不満が出た。ぼくは警官が、自分たちまでおまつりに参加しているつもりになり、示威行進をやっているつもりで歩きまわったのがいけなかったのではないかと思っている。彼らは自分たちの役目を果たせばよかったのだ。

彼らの役目、それは即ち、パレードの裏方として、陰にかくれて群衆整理することである。もしおまつりに参加するつもりなら、パレードにとびこんで踊り出せばよかったのである。

最後のビバ・サンバをもっと長くやればよかったのに、という意見が出た。

そして、その時にこそ警官も、群衆と一緒に踊ればよかったのだ、踊らない警官は踊りの中へひきずりこめばよかったのだ、という意見である。しかしもしあの時、現実にそんなことをしたらどうなるか。警官が踊り出せば職務怠慢になる。警官を踊りの列へひっぱりこめば公務執行妨害になる。どの道、ただではすまない。してみればやっぱり、あの日の彼らの役目は裏方でしかなかったわけだ。裏方が表へ出てきたから、おまつりの効果が半減したのだ。では、警官の威嚇がなくなり、群衆すべてが踊り出した場合は、手のつけられぬ混乱が起るのではないか、ということになってくる。

4、最悪の事態即ちおまつりにつきものの怪我人と人死にについて

やはり怪我人や死人が出るのは好ましくないという意見と、おまつりで二、三の人死にが出ないようでは面白くないという意見が対立した。

ぼく個人の意見としては、もし死んだとしたらおまつりの日が命日になるのだから儲けものではないかと思うのだが、タテマエ道徳的に非難されるのがいやだから喋らなかった。

この討論は、おそらく解決の道がないまま平行線をたどるだろう。

5、理想的な神戸まつりはない

神戸まつりはどうあるべきか。これは各人各様の意見がある筈だから、多数決で結論を出せばよいといったものではない。

と、いうことは、どうあるべきかと議論しているうちが花であって、形式がはっきりしてしまったのでは面白くないし、そっぽを向く人も出るであろう。

理想的な神戸まつりなど、ない方がいいという結論が出、ぼくもこれには賛成だった。

来年の神戸まつりがどの程度前進しているか、それを期待すべきなのだろう。

★マンガ・ルポ★

神戸まつりをたづねて

レポーター　佐々木 侃司 <マンガ家>

日本はしめり気の多い国です。しかし、神戸はからっとしめり気のない所です。日本にはごたごたした都会があるのですが、神戸はほんとに都会らしい都会です。何といつても明るいし、国際都市でもある上に、神戸人はみなセンスにすぐれた独特の民族です。だから、神戸では、「同じ日本人やないか」といっても、話は始まらない。だもんで、神戸まつりへ異民族として出かけてみました。
「くそーっ。楽しくやりゃあがって」が実感でした。

「あくせく売るちゅうより、なんや、じんわりつくって、好きなようにじんわりと売る……」
青年広場の片すみには、テントをはってオリジナル装飾品をつくって売っている青年の一群が居ました。味なものがつくられていて、そのへんのメーカー物よりもうんといきなものばかりで、値段も高くない。人間の手を尊重する創造の心を青年たちはとりもどしていて、あくせく何のためやら働いている私たちの心の貧しさを、はづかしく自省するのでした。パレードの裏に人間がいたのです。

「道路て意外に広いもんやね」

パレード街道は、自動車立ち入り禁止。こうなると道路て広いもんですね。テント地をしいて若い男女たちが、パレードに関係なく寝そべって神戸の空を眺めていました。ああ一瞬の人間だけの空間かと、このシアワセはもう昔のことかとさびしくなるのでした。

「あんた、肩がかなり落ちこんでまっせ。」
「へえ、ほれてもうた弱味で……」

パレードを見る群衆の後で、あっぱれ女房を肩車に奪闘中のだんな……
「わし、まつりきらいや」
と弱々しいつぶやき、恐怖の場面をこの舞台裏で目撃した時のショックはなかなか忘れられないのではないかと、どこぞに亭主族団体に立ち上る英雄はおらんもんかいな。

「見てみい。わしによう似て、しっかり歩きよるわい。」
「何いうてんねんな。私に似て落ちついてるやんか。」

パレードの先導として、小さな少年がしつかりと歩いてます。涙ためてうれしそうな両親の夫婦げんかでありました。神戸に住んでない私のひが目か、ボーイスカウトの少年たちはどれもしっかりと落ちついて、更にはみなきりっとした美少年ばかりでした。これは、神戸人でない私にとっては非常におもしろくない。

「あんたら　ようにあうなあ。」

と、パレードの後の和服姿の外人さんの声です。日本語でありましたですよ。日本人が外人のスタイルをこなし、外人さんが日本人になりきれる。これが神戸です。神戸のセンスです。うらやましいやら、にくたらしいやら……

O-SHIBATA

世界をまたにかける
ビジネスエリートのセカンドパスポート

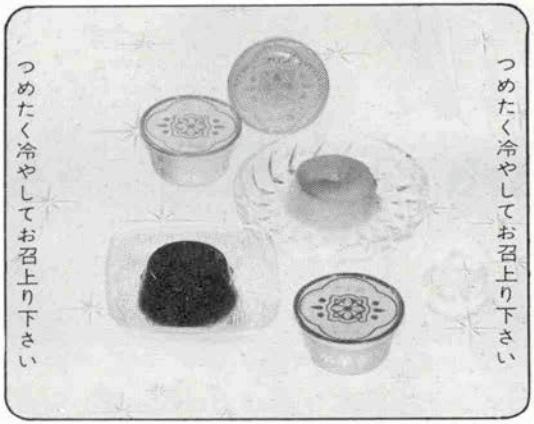
柴田音吉洋服店
神戸・元町4丁目南　神戸341—0693
大阪・高麗橋2丁目　大阪231—2106

新発売!!

さわやかな味覚の缶詰

ファミリーセット

水羊羹・プディング・マロンピエール詰合せ



3ヶ入¥ 250　6ヶ入¥ 500　12ヶ入¥ 1,000
18ヶ入¥ 1,500　24ヶ入¥ 2,000

神戸にそだって 70年

神戸元町 風月堂

元町3丁目　TEL391-2412～5
さんちかスイーツタウン TEL391-3455